森林レンジャーがゆく

（95）

猿梨

昔、沖縄の沢をジャブジャブ歩いているときに、うずらの卵大の茶色い実のような物が１粒流れてきました。現地の人に尋ねると「とりあえず食べてごらん」と勧められ、恐る恐る一口食べてみると、出会いの場に似つかわしくない上品な味！このギャップもあってか、今でもあの時の味と感動を覚えています。この上品な味の実はシマサルナシで、野生のキウイフルーツだと知り再び驚きました。日本での自生地は、本州では紀伊半島と山口県、四国、九州、沖縄なので、市内の山で見ることはできませんが、同じマタタビ科のマタタビやサルナシは自生しています。

今回は、サルナシについてのお話です。実が梨に似ていることと猿が好んで食べることからサルナシ（猿梨）と名が付き、実にはビタミンＣがレモンの約10倍も含まれるなど、食卓に並ぶキウイフルーツに勝る栄養価があるようです。そして、野生動物からの人気も高い果実です。サルナシは、ツル性の植物で他の樹木などに巻き付いて育ち、高所に実を付けるため木登りができる野生動物が優先的に食べます。これまでのほ乳類痕跡調査では、ツキノワグマ、サル、タヌキ、テンのフンの中にその種子を確認しています。その中でも、長期間フンの中に種子が確認できるのはテンです。実が完熟する前の夏から冬まで確認できる年もあるため、好んで食べていることが分かります。人気のサルナシの実ですが、たんぱく質分解酵素が含まれていて、食べすぎると舌の表面が溶けてイガイガとした痛みを感じるため、一度に大量に食べることができません。少しずつ色々な所に種子散布してもらうサルナシの戦略だと考えると、多様な野生動物が実を食べる中で、自分の存在をアピールする目印として、色々な所にフンをする習性を持つテンは、正に良きパートナーです。サルナシはツル性の植物なので、林業では針葉樹の成長を妨げるため嫌われる存在ですが、市内に広がる森の大半を占める針葉樹林の林縁部や美しく色づく秋の広葉樹林を豊かに彩る一員であり、野生動物にとっては「東北のヤマブドウ」のような希望の存在という側面があると感じています。（加瀬澤）